

# 学級や学年のよさに目を向け、 自ら学校生活をつくる子どもの育成

## ～5年生学年委員会プロジェクト活動を通して～

聖籠町立山倉小学校 中村 朋美 (H28年度)

### 主張

人は自分と他人とを比較することで、一喜一憂する。「人」を「学級」に置き換えて考えてみる。学級には、集団の凝集性や生活満足度、学級文化、学級に対する愛着や誇りといった「学級意識」がある。私は、学級意識には2種類あると考える。1つは「他学級」を比較対象とし、自分たちより下に見ることで得られる優位性や安心感を基にした学級意識である。もう1つは「これまでの自分たち」を比較対象とし、様々な協働体験を通して個と集団の成長を実感することで得られる学級意識である。私は後者のような学級意識を高め、どのような局面に出会っても、問題を解決し乗り越えていくことのできる学級集団づくりを目指している。今年度、学年2クラスの(学年)主任となり、自学級の意識だけでなく、学年としての意識も並行して高めていくことの重要性を強く感じた。

学年意識を高めるために、私は、「学年委員会プロジェクト活動(学年版の係活動)」の有効性に着目した。係活動には、①児童の創意を生かしやすい②自主的、実践的な活動を展開しやすいというメリットがある。また、学年委員会プロジェクト活動の取組の中に、学年の願いを共有する場を設定することで、学年で同じ方向に向かって活動を進めていくことができると考えた。

このような学年委員会プロジェクト活動により、学年意識を高めることで、互いの学級を競争相手ではなく、リスペクトし合う仲間として見るができると考えた。そして、私が目指す学級意識を高めていくことができると考えた。

### 1 研究主題の設定の理由

小学校学習指導要領特別活動の目標(3)には、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」とある。児童一人一人が様々な集団活動の中で、互いのよさや可能性を発揮しながら、自らの学校生活を自分たちでつくっていかうと意欲を高めるためには、どのような局面に出会っても、主体的に問題を解決し乗り越えていく経験の積み重ねが大切である。

これまで私は「自学級」のみに目を向け、他学級との連携をあまりせずに、児童の「やってみたい」という気持ちを優先した学級経営を行ってきた。その結果、いわゆる「学級王国」をつくっていたことは否めない。今年度、学年主任になったにもかかわらず、5月にとった学級アンケートは残念な結果となった(図①)

#### ～5年1組学級アンケートの結果～ (R5.5.26) (図①)

**5年1組のことをどう思っていますか。肯定的回答 96%**

自学級に対する肯定的回答の例 ・元気 ・おもしろい ・楽しい

自学級に対する否定的回答の例 ・うるさい

**5年2組のことをどう思っていますか。肯定的回答 21%**

他学級に対する肯定的回答の例 ・協力できそう ・静か(話を聞くとき)

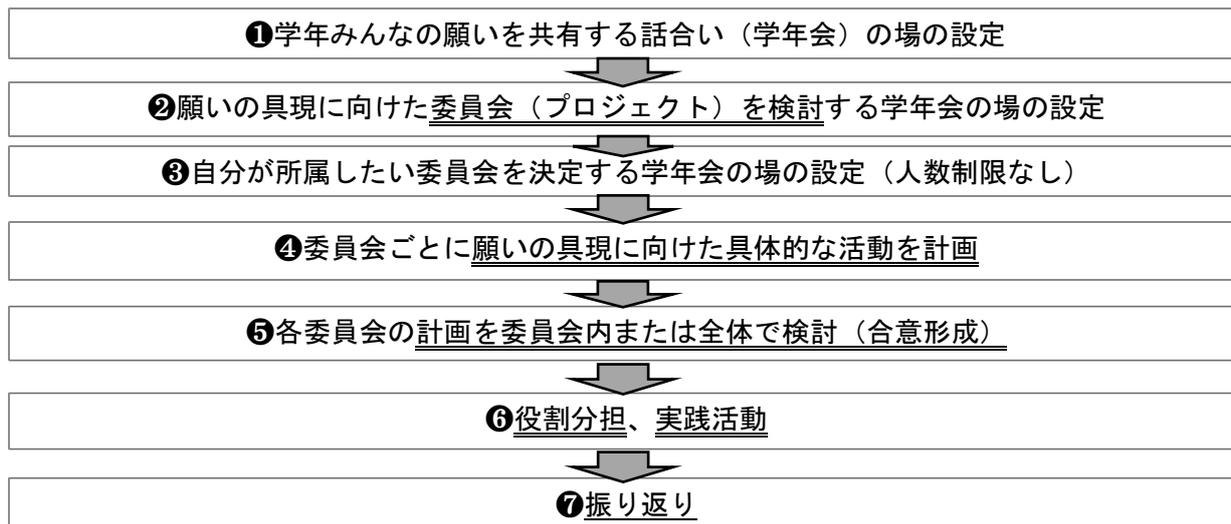
他学級に対する否定的回答の例 ・元気がない ・うるさい ・陰キャが多い

アンケート結果からも分かるように、他学級のマイナス面に目を向け、自分たちよりも下に見ることで優位性や安心感を得ようとする学級意識が生まれてしまった。この反省から私は、自学級のさらなる成長には、自己成長に向かう努力とともに、他学級に対するリスペクトが不可欠であると考えた。このような「努力」と「リスペクト」によって作られる学級意識を醸成するためには、学年で協働する活動が必要だと考え、学年版の係活動である「学年委員会プロジェクト活動」を組織することにした。

### 2 研究仮説

願いの共有、活動内容の検討、実践活動等、協働的な学年活動(学年委員会プロジェクト)を意図的に組織することで、児童は学年としての意識を高め、互いのクラスのよさを認め合うとともに、自学級のよさを再認識し、学校生活を主体的につくっていかうと意欲を高めることができるだろう。

### 3 研究内容



- (1) 学年委員会プロジェクト活動を2週間に1回のスパンで取り組み、願いの共有や活動内容の検討、ふりかえりの場を設定していくことで、学年意識の向上を図る。
- (2) 振り返りの際、教師による問い返しを行うことで、自分たちの成長（他学級のよさにも目を向けることができるようになった点）を実感できるようにする。

### 4 検証方法

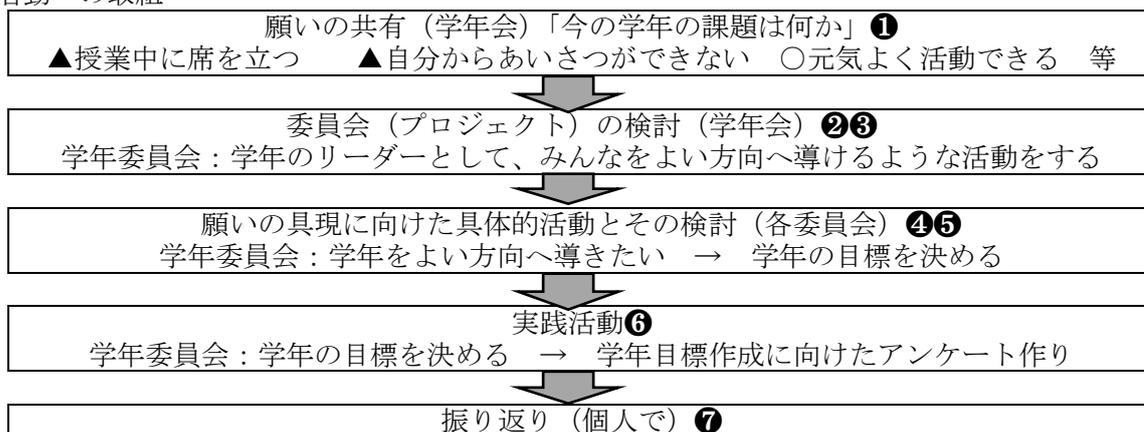
- (1) 学級アンケートによる個と集団の意識変容の分析
- (2) 願いの達成に向けた学年委員会プロジェクト活動と児童の振り返りによる考察
- (3) 観察対象児 A 夫の自学級や他学級の友達との交流を通じた意識の変容の観察

### 5 研究の実際

- (1) 学年の課題を解決するための学年委員会プロジェクト活動（R6.4月～6月実施）
  - ①活動実施前の児童の実態

<b>【学級集団5年1組の実態】</b>
明るく前向きで行事には一丸となって取り組むことができる。また、学級のよさに目を向けることができ、互いに認め合う姿も見られる。しかし、他学級（5年2組）との折り合いが悪く、マイナス面に目を向けてしまう。一緒に活動したり、遊んだりすることは少ない。
<b>【対象児A夫の実態】</b>
学級の中心的な存在。学習や運動に苦手意識があるが、リーダーシップを発揮する力はある。しかし、自分に自信がもてず、「できない」「無理」とマイナス発言を口にすることが多い。自学級と他学級とを比較し、相手のマイナス面に目を向けて自分たちを優位にしようとする発言が多い。

#### ②活動への取組



#### ③活動による児童の意識の変容

第1回学年委員会プロジェクト（学年会）で、今の5年生の課題を出し合った。そこでは、「授

業規律がよくない」「自分からあいさつができない」等の課題が出された。児童は自分たちの課題を解決するためには、どのような委員会が必要か話し合い、8つの委員会を組織することにした。ほとんどの児童が、所属したい委員会を自分で決める中、A夫は他学級の児童と活動することに対して関心をもてず、委員会を決めることができなかった。担任との相談の上、渋々学年委員会に所属することにした。学年委員会は「学年をよい方向へ導くための共通の目標をつくる」という活動を計画した。プロジェクト終了後、次の活動に意欲的に参加できるようA夫と個別に振り返りを行った。

第2回学年委員会プロジェクトで、学年委員会は計画したことを実行するための話し合いを行った。するとA夫は、「学年のみんなにどんな5年生になりたいかを聞くのはどうか」と案を出した。学年委員会のメンバーは、A夫の案に賛成し、アンケート作りを行うことになった。他学級の児童（学年委員会の）からも認めてもらい、A夫の意識にも変化が見られ始め、一緒に活動しているA夫から楽しそうな表情も見られるようになった。活動後、学級アンケートを実施するとA夫は以下のように記述した。（図②）

～対象児A夫の学級アンケートの結果（R5.6.22）～（図②）

自学級（1組）のことをどう思うか → **元気なクラス**  
 他学級（2組）のことをどう思うか → **行動が遅いクラス**

学年委員会プロジェクト活動を通して、他学級のメンバーとコミュニケーションを取りながら、一緒に活動することはできるようになった。しかし、「他学級のよさ」に目を向けることにはあまりつながっていなかった。（図③）

～5年1組学級アンケートの結果～（R5.6.22）（図③）

5年1組のことをどう思っていますか。肯定的回答 **96%**  
 5年2組のことをどう思っていますか。肯定的回答 **67%**

他学級のよさに目を向けるためには、「一緒に活動できて嬉しい」「一緒に活動したら、こんなことができるようになった」という協働体験が大切であると感じた。そこで、次の学年委員会プロジェクトでは、願いの共有を自然体験教室という学年での協力が不可欠な学校行事と関連付けて行うことにした。

(2) 学校行事と連携させた学年委員会プロジェクト活動（R5.7月実施）

① 7月活動実施前の児童の実態

【学級集団の実態】

学年委員会プロジェクト活動以外でも、他学級の児童と過ごす児童が増えてきた。

【対象児A夫の実態】

学年委員会プロジェクト活動では、他学級の児童と一緒に活動する姿が見られた。しかし、他学級に対してマイナス面に目を向けた発言は続いている。

②活動への取組

願いの共有（学年会）「どんな自然体験教室にしたいか」①

- ◎5年生みんなで協力して、楽しい自然体験教室にしたい
- ◎自主性を育てたい（みんなで決める、みんなで実践する）

委員会（プロジェクト）の検討と役割分担（学年会）②③  
 ・学年委員会 ・昆虫委員会 ・仲よし委員会 ・イラスト委員会 等

願いの具現に向けた具体的活動とその検討（各委員会）④⑤  
 昆虫委員会：自主性を育てたい → みんなが喜ぶ昆虫イベントを考える

実践活動⑥  
 昆虫委員会：みんなが喜ぶイベントを考える → クワガタ大好きプロジェクト

振り返り（個人と学級で、教師が問い返しをしながら実施）⑦

③活動による児童の意識の変容

A夫は昆虫が大好きで、クワガタ採りに夢中だった。A夫は、昆虫委員会の委員長に推薦された。初めは自信のない発言をしながらも、活動を行うごとに進んでアイデアを出したり、友達にアドバイスをしたりする姿が見られた。昆虫委員会で、A夫を中心に学校で飼育していたクワガタを夏休み中はどうするかという話し合いになった。A夫は「5年生の希望者に分けるのはどうか」と案を出した。すると、B夫（2組のメンバー）が、「5年生だけでなく全校に希望をとって見ないか」とA夫の案に付け加えた。A夫は「いいね！B夫さん天才！」と、B夫の案に大

賛成し、その日から休み時間にも自主的に集まり、全校のみんなのために準備を進めた。

活動後の振り返りでは、右のように記述していた。  
 (図④) A 夫は活動を通して、昆虫委員会のみんなで協力して準備できたことに嬉しさを感じていた。また、A 夫の記述「みんなで協力して準備できて嬉しい」をもとに、学級で振り返りを行った。(図⑤)

この振り返りの様子からも、学年の願いを共有し、同じ願いに向かってともに活動したことが、1組の児童の2組に対する見方の変容につながった。教師が問い返しをしたことで、「他学級のおかげでできるようになったことが増えた」と、他学級に対して感謝の気持ちを抱いている自分たちを自覚させることにつながった。

昆虫	委員会
<b>今日やったこと</b>	
水曜日にクワガタをくばる準備をした。ペットボトルで虫かごをつくった。	
<b>ふりかえり</b>	
昆虫委員会のみんなで協力して準備できてうれしい。 クワガタをたくさんの人に配ってよろこんでもらえるようにがんばった。	

昆虫委員会でのA夫の振り返り (図④)

～A夫の振り返りをもとにした5年1組での振り返り～ (図⑤)

T:「2組と一緒にできて嬉しい」のは、なぜだろう。

C:嬉しさが倍になるから。

D:楽しさも倍になるから。

E:できることも増えたと思うから。

T:「できることが増えた」ってどういうこと?

F:2組のおかげで、5年生だけのイベントでなく全校のイベントにすることができた。

T:「今のFさんの『2組のおかげで』という言葉聞いてどう思った?」

G:「たしかに、2組がいなかったらこんなに楽しくならなかったかも…。」

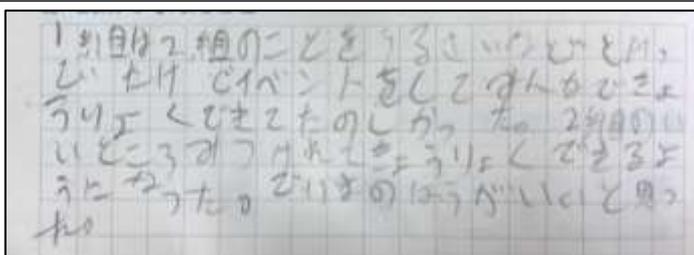
H:「自然教室も、2組と一緒に協力して楽しくしたい。」

～5年1組学級アンケートの結果～ (5月末→6月末→7月末) (図⑥)

5年1組のことをどう思っていますか。	肯定的回答	96%→96%→96%
5年2組のことをどう思っていますか。	肯定的回答	21%→67%→83%

また、1組に対する肯定的回答率が5月末→6月末→7月末で96%と同じであることに対し、「中身は違うのではないか」とつぶやく児童がいた。

(図⑥)「2組と協力できるようになったり、2組のよいところに目を向けることができるようになったりした自分たちって、なんかいいよね!」と、学年委員会プロジェクトを行う中で自分たちの成長を実感することができた。(図⑦) 学年委員会プロジェクト活動の取組は、学級や学年のよさに目を向けるきっかけを与える上で有効に働いたと考える。



学級での振り返り後のA夫の振り返り (図⑦)

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- ・学年委員会プロジェクト活動を組織し、児童と一緒に活動する喜びや達成感、学年の願いを共有し、その願いに向かって活動を進めたことは、学年としての意識を高めるのに有効であった。
- ・活動の振り返りの場面で、児童の発言に対して教師が問い返しをしたことは、他学級に対する児童の思い、またその思いの根底にある感情(感謝の気持ち)に気付かせる上で有効であった。

### (2) 課題

- ・実践①では、児童のマイナス面(学年の課題)から願いにつなげたが、実践②と比較すると「他学級のよさ」に目を向けることにあまりつながらなかった。マイナス面だけでなく、プラス面にもっとスポットライトを当てる必要がある。
- ・他学級への思いを「感謝」から「リスペクト」にまで高める活動の在り方や、振り返りの仕方(教師の問い返しの仕方を含めて)を探っていく必要がある。

## 7 参考文献 大和久勝・丹野清彦「リーダーを育てよう」クリエイツかもがわ、2015年